

|         |                        |  |  |
|---------|------------------------|--|--|
| 氏名(本籍地) | 戸井田 克己(長野県)            |  |  |
| 学位の種類   | 博士(学術)                 |  |  |
| 学位記番号   | 博乙第73号                 |  |  |
| 学位授与年月日 | 平成25年3月16日             |  |  |
| 学位授与の要件 | 昭和女子大学学位規則第5条第2項該当     |  |  |
| 論文題目    | 青潮文化論—その地理学的・地理教育学的研究— |  |  |

|        |      |          |       |
|--------|------|----------|-------|
| 論文審査委員 | (主査) | 昭和女子大学教授 | 田畑 久夫 |
|        | (副査) | 昭和女子大学教授 | 山本 暉久 |
|        |      | 昭和女子大学教授 | 増田 勝彦 |
|        |      | 関西大学教授   | 野間 晴雄 |

## 論文要旨

本研究は、「青潮」(対馬海流)がもたらす日本の文化(本研究ではこれを「青潮文化」と呼ぶ)の特性を、フィールドサーヴェイを主体とする研究によって明らかにしようとするものである。また同時に、青潮文化論の意義を地理教育の文脈から検討するとともに、地理教育への影響についても考察しようとするものである。

「青潮」という語は、いまだ一般にはそれほど知られているとはいえないが、地理学関連の辞典類や、地名によっても認められている、対馬海流を指す愛称である。日本の風土は、この南からの海流の影響を強く受けながら形成されてきたといえる。その程度は太平洋岸を流れる「黒潮」(日本海流)以上ともいえ、対馬海峡部を通過することによって、南洋からだけでなく、朝鮮半島や中国、沿海州からも人や物、動植物、生業文化などを日本に伝播させた。

以上を受け、本研究は、以下の事柄をおもな研究目的とした。

- (a) 青潮文化のありようを、主として日本海沿岸を中心に継承されてきた民俗文化のいくつか(養蜂、牧畑、イカ漁、タタラ製鉄、赤米習俗、魚醬、焼酎、石焼きの風習など)に求め、その実状を現地調査によって把握し、特性を明らかにすること。
- (b) 地理教育を取り巻く現下の諸条件(教育関連法規、学習指導要領、地理教科書など)を検討し、地理教育が抱える今日的課題や問題点を考察すること。
- (c) (a)・(b)上に立ち、青潮文化論のもつ意義を地理教育の立場から検討すること。また反対に、青潮文化論のもたらす地理教育への影響を考察すること。

研究目的(a)について明らかになったのは以下の事柄である。すなわち、日本における青潮文化は、あるものは東南アジアや、遠くポリネシアにまで連なる文化的な影響を見いだ

すことができ、またあるものは朝鮮半島や中国との強い繋がりを想定できた。その一方で、北から南下する「白潮」(リマン海流)の影響を受けて、北方的な文化の影響も少なからず認められた。日本文化はこのように、南方のおよび大陸的な文化要素を基調としつつ、北方的な文化要素が融合して形成されたものであり、その形成に「青潮」などの海流が大きな役割をはたしている。

研究目的(b)について明らかになったのは以下の事柄である。すなわち、2006年の教育基本法改正で、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与するとともに、日本の伝統と文化を尊重し、郷土を愛する態度を養うこと」が新たに教育目標に掲げられた。これらの態度や認識を育むには、地理的なものの見方・考え方の獲得や、その土台となるべきフィールドでの実地学習が肝要となるが、ことに高校での地理教育が1990年代以降著しく低迷し、その実現は難しい状況にある。そこで、地理教育の現状を改善し、上記の教育目標の実現に向け努力していかなければならない。

研究目的(c)について明らかになったのは以下の事柄である。すなわち、青潮文化論を突き詰めていくと、「アジア・太平洋地域との連続性」や「日本文化のもつ合理性」がよく理解される。これらの観点は、地理教育の立場からも高く評価されるものであり、同時にまた、地理教育に対しても好影響を与えるものである。これらの論点は、より具体的には以下のように整理することができる。

- (1) 日本は世界各地と歴史的・文化的に密接な関係にあるということ。こうした認識は、各国との間で、今後より緊密な友好関係を築いていく上で重要な視点となろう。
- (2) 日本の文化は多様な文化的要素からなるということ。日本文化は土着的な文化と、南洋からの文化、朝鮮半島や中国からの文化、そして北方からの文化とが融合して形成されている。そうした多文化的な認識は、異なる価値観をもつ人々や、新たに外国からやってくる人々と共生していく上で重要な視点となろう。
- (3) 青潮文化の随所に含まれる知恵と工夫が、「持続可能な生活」のあり方に参考になるということ。今後われわれは、環境との関わり方を再構築していかなければならないが、そのための示唆が青潮文化のなかに多く含まれている。子供たちがそれに気づくことは、地理教育の推進上も重要な視点となろう。

以上の主張を展開するため、以下の章立てで研究を進めた。

第1章の「地理教育をめぐる動向」では、地理教育が本来的にもっている課題を明らかにするとともに、近年の地理カリキュラム(学習指導要領や教科書)が抱える問題点を検討した。

第2章の「青潮文化論の検討」では、まず「青潮」の語を定義するとともに、その語義を解釈し、暖流たる青潮が日本文化に及ぼしている影響について考察した。そしてその上で、この分野における先行研究を整理するとともに、隣接する文化論のうち照葉樹林文化論とナラ林文化論について検討し、青潮文化論のもつ意義についてあらためて検討した。

第3章の「青潮の自然環境」では、青潮流域の気候環境の特性を考察し、青潮海域で見られる特徴的な動植物を挙げた。

第4章の「青潮海域と生業」、第5章の「青潮海域と赤米習俗」、第6章の「青潮海域と衣食住」では、フィールドサーヴェイを主体にして、養蜂、牧畑、イカ漁、タタラ製鉄、赤米習俗、魚醬、焼酎、石焼の風習などについて検討した。おもな調査対象地は、北から順に、奥尻島（北海道）、飛島（山形県）、粟島（新潟県）、佐渡島（新潟県）、隠岐（島根県）、壱岐（長崎県）、対馬（長崎県）、福江島（長崎県）、種子島（鹿児島県）、八重山諸島（沖縄県）などの青潮および黒潮に洗われる島々と、青潮的気候風土の濃厚な奥出雲（島根県）である。これら青潮文化に関する現地調査から、日本文化の特性が南方的および大陸的な文化要素を基調としつつ、北方的な文化要素が融合して形成されたものであることが明らかとなった。

終章「結論－青潮文化論の地理教育学的考察－」では、第4章～第6章で検討した青潮文化のありようを地理教育の立場から再度検討した。そして、今後の地理教育のあり方に対して一つの提言を行った。すなわち、青潮文化の特徴として、与えられた環境をうまく使いこなし、それでいて環境に優しい、生活の知恵の数々を指摘できる。そうした青潮文化の特性を理解し、他地域との繋がりを把握することは、上記(1)～(3)の観点を育み、地理教育の活性化に寄与することができよう。